



転職して編集者になる!

フリーや編プロから出版社に入れる?

出版社、編集プロダクション、フリーライターそれぞれメリット・デメリットを知りたいと希望する人が多数。「フリー」という働き方に興味を持っている人はたくさんいるものの、営業活動が大変そう……との不安に感じているようだ。

好きな分野はいつになったら担当できる?

長い下積みを積んでからでないと、雑用係になってしまい、興味のある分野の本・雑誌の編集はできないのではという声。また、ライター任せではなく、実際に文章を書くことはできるのかという質問もあった。

給与・福利厚生は?

残業代、フレックス制の有無など、やっぱり上がった収入面の質問。福利厚生面では、週刊誌や月刊誌のスパンでは長期休暇は取れないのではないかと声が上がった。

COLUMN

出版界で編集者として働きたい理由は?



今回、併せて調査した「出版界で編集者として働きたい理由」。堂々の1位に輝いたのは「活字が好き(44名)」というもの。調べること、人の話を聞くことが好きだからという回答もあった。2位は「社会に情報を伝えたい(15名)」。「面白い、楽しい、美しいなど良いものを良い形で伝えたい」「情報を選択する力を身につけたい」「スクープを取る時のわくわく感を味わいたい」などの声。3位は「経験がある(8名)」というもの。編集者として実際に記事を書いたことがある人のほか、大学時代にサークル雑誌を作っていた人も。そのほか、マンガ家の経験や、料理研究家のアシスタント経験を持つ人もいた。

その他回答

原稿(DTPおよび営業)で編集者に振り回されているので自分が振り回す立場にならなかった。代理店勤務で雑誌内容に口出しできないのが不満。フリーで働きたいから、エキサイティング・ダイナミックなイメージがあるから、常に動いている業界だから、自分が「営業」に付いた経験があるから、次の当り方次第ですごく光るものは世の中にたくさんあるはずだから。幅が広く、毎朝さまざまなことにチャレンジできるからほか

ここでご紹介した多数回答のほか、「業界の慣習」「会社内での部署異動の有無」「本の売り上げノルマはあるのか」「週刊誌・月刊誌はどちらが楽か」など、各出版社の内情を詳しく知りたいという声が多く挙がりました。そこで次ページからは、さまざまな経験を経て編集者に転身した、4人の転職経験者の転職ストーリーをご紹介します。

アンケート調査

103人に聞きました 「編集者を目指す 上での不安は？」

2007年1月～10月の書籍、月刊誌、週刊誌の販売額は、1兆7482億円(出版科学研究所調べ)。それぞれ90年代後半にピークを迎えた後、今世紀に入ってからは、右肩下がりが続いている。業界の縮小とともに求人も減少傾向にあるのでは……と思いきや、狭き門である出版社の編集職を目指す人は、それでも後をたたない。弊誌編集部では、そんな憧れの編集職を目指す学生・社会人計103名を対象にアンケート調査を実施。就職・転職活動をする上での不安について聞いた。

調査概要
●調査実施日: 2007年12月1日(土)、5日(水)
●調査者: 月刊「編集会議」編集部
●対象者: 「編集・ライター養成講座」受講生103名

「経験なし30歳」で大丈夫?

ただでさえ倍率が高いので「経験あり」が優遇されて、異業種からの転職はハードルが高いのではという不安の声が多数。コネなし、学歴なしでホントに入れるの?という声も。

結婚は不利?

睡眠時間、実労働時間など、日々の生活の実態にも質問が集中。薄給激務が噂される編集職に、仕事と家庭の両立を望むものの「結婚・出産後も続けていけるのか」。今後のキャリアプランがイメージできない、という女性の声も目立った。